

(2017年3月)

サイトワールド参加報告

理事 伊藤 聡子

今年度から理事になりました伊藤聡子と申します。点字業界の大先輩の皆様の中で、お役に立てるかどうかわかりませんが、どうぞよろしく願いいたします。

さて、毎年恒例となりました視覚障害者総合イベント「サイトワールド2016」が、11月1日から三日間、墨田産業会館にて開催され、日本点字普及協会も初日の午後、「今日（11月1日）は、日本点字126歳の誕生日」と題して、9階の会議室をお借りして、講演会と体験会で参加いたしました。

前半の講演会では、視覚障害者お二人にお話ししていただきました。

まず、当協会会員でもある障害者職業総合センター特別研究員の指田忠司さんから、「点字と社会参加ー日本と海外の状況を比較して」というテーマのお話を伺いました。ご自身の点字との関わりのあと、視覚障害者のバリアフリーに点字が果たす役割について解説され、その中で「点字は自己管理が可能な文字であり、紙と点字板・点筆だけで書ける文字」とおっしゃっていたことが印象に残りました。

点字と社会参加に関する内外の比較では、海外では識字率が低いためか、投票方法自体がパンチで穴をあけたり番号を選んだりするようで、点字投票が行われていないそうです。

最後に、今後の方向性として、点字の必要性の把握、点字を習得できる場の提供、点図や表の読み取り訓練、利用者のニーズの多様化への対応が重要と締めくくられました。

次に、モンゴルからの留学生で、筑波技術大学大学院生のバトバヤル・エンフマンダハさんから、「モンゴルの点字の事情ーモンゴルの盲人について紹介」をテーマにお話しいただきました。マンダハさんは2010年から来日され、それまでは、モンゴルに1校しかないウランバートルの盲学校と、日本語専門の大学で勉強されたそうです。当時の盲学校では人数分の点字教科書がなく、先生が読む墨字の教科書を書き写していて、点字用紙も少なかったそうです（2015年からようやく点字教科書が行き渡るようになったとか）。大学では、視覚障害者であることが理解されず、大変苦労されていた様子が語られました。

ところで、モンゴルの文字はロシアから伝わってきたもので、点字は日本と同じ6点からなり、一つの文字が一マスで表せるそうです。しかし、日本語の点字は、濁音など二マスで1文字を表すことから、とても難しく、またモンゴル点字に比べ日本はサイズが小さく、切れ目が分かりづらいため、読みにくいそうです。

マンダハさんは、「じっくり点字を読まないの意味とか言いたいことがよく分からない。点字じゃないと勉強ができない。点字は手放せないもの。物って言いたくない

くらい大事なもの。」とおっしゃっていました。

後半は凸面点字器試作品と、Lサイズ点字の体験会を行いました。

凸面点字器の試作品は、多くの方に試していただいたところ、点字使用者から「書きにくい」「ポツポツと打った感覚がない」などの感想が聞かれ、皆さん左から右に向かって書くことに戸惑われていました。

一方、Lサイズ点字にさわってくださったのはほとんどが晴眼者で、一覧表を見ながらではありますが、「アメ アニ アナ ウニ ウメ」などの短い単語を触読できていました。私としては中途視覚障害者にさわっていただき、点字を読むきっかけになってくれればと思っていましたので、少し残念でした。

点字をあきらめてしまったり、初めから無理と思っておられる中途視覚障害者にとって、テーマが点字というだけで、足を運んでもらいつらい可能性が考えられます。今後も体験を通じて点字使用者を増やすためには、三日間は難しいかと思われませんが、8階の機器展示フロアで行うというのも考えてみてはいかがでしょうか。

当日、会員をはじめお越しくくださった皆様、景品を提供していただきました岐阜アソシア様、ご協力ありがとうございました。

【凸面点字器開発の状況についてお知らせ】

点字普及協会では、発足当初から中途視覚障害者が点字学習する際のハードルを少しでも低くするため、そして、小学生が「総合的な学習」などで、短時間で点字の読み書きを体験する際に便利な道具として使うことができるよう、凸面点字器の開発に取り組んでいます。

開発には（有）出雲樹脂（島根県出雲市）に協力していただき、初めは3Dプリンターで試作品を作っていただき、検証・評価を行ってきました。

2016年の通常総会（4月23日）では、26マス4行の実際の点字器の形になった試作品（プラスチックを削り込んだもの）を皆さんに見ていただきました。そこで多く聞かれた感想・意見を基に改善点をまとめました。また、この段階で、一マスの大きさ、点間・マス間の距離、点の大きさ・高さなどがほぼ決まったので、いよいよ金型による試作へと進みました。

10月初旬に金型による試作品第1号が届きました。定規は下板が白、上板が透明、点筆はすべてプラスチック製で大小2個、それに白の半濁色のケースです。このうち、定規とケースはほぼ使える状態でしたが、点筆は先が太すぎて肝心の点がよく出ないため、すぐに改良をお願いしました。

10月中旬に、点筆の先を改良したものの1種類（大・プラスチック製）が送られて来ましたので、これに差し替えて、試作品のモニタリング希望者に順次お送りして意見を伺いました。

11月1日（火）に「サイトワールド2016」会場で行った点字普及のイベントで試作品を展示し、入場者に試していただきました。

これらを通じて、約20名のモニターの方に評価していただき、さらにモニターの方が身近な人に試していただいて得た評価を加えると、100人を超える方々のご意見・ご感想を得ることができました。

基本的には、全員が凸面点字器の開発に肯定的でした。また、全員から、点字が書きにくい、点の出が悪いという点字器としては致命的な指摘がありました。

モニタリングの評価を受けて事務局会で検討した結果、12月6日（火）に出雲樹脂に対してメールで以下の改善点を伝えました。

1. 定規について

- (1) 定規下板の蝶番側の紙押さえの位置を、左へ3mm移動する。
- (2) 定規下板裏面の表示を、「日本点字普及協会」から「企画・日本点字普及協会」に変更する。

2. 点筆について

- (1) 点筆の先を金属にする。
- (2) 点を書いたときに、「ポツッ」と音がし、書いた実感が得られるようにする。
- (3) 虚点の出を、可能な限り小さくする。

3. ケースについて

- (1) ケースが開けにくい。子どもでも楽に開けられるよう工夫する。
 - (2) ケースの透明度をもう少し上げて、中の点字器の色が分かるようにする。
-

2016年暮れに点筆の改良品の見本を送っていただき、2017年1月に出雲樹脂と改修のための最終打合せを行いました。現在は、2016年度内の完成を目指して、改良に取り組んでいます。

以上、モニタリングにご参加くださった多くの方々に感謝しながら、これまでの経過の概要をご報告いたします。

(以上)